たまのよこやま

東京都埋蔵文化財センター報　No. 39　平成9年2月20日

発行
(財)東京都教育文化財団
東京都埋蔵文化財センター
〒206 東京都多摩市落合
1—14—2
☎ 0423-73-5296
平成9年2月20日

No.669遺跡の土器　遺跡が少なく資料が限られるため、「幻の縄文時代の土器」と呼ばれる縄文前期末の十三菩提式。（2頁〔表紙解説〕参照）

原点に立って

総務課長　佐藤　修一

多摩ニュータウン開発事業が始まってから三十年が経過しました。このビッグ・プロジェクトは、日本の開発事業の先導的役割を果たし、これにあわせて当センターの埋蔵文化財調査も進められてきました。

三月二十九日から十一月末にかけて、施行者や関係市等により、多摩ニュータウン三十周年記念事業が実施されることになりました。

この事業は、多摩ニュータウンの街づくり三十周年を契機として、多摩ニュータウンの社会的意義や今後のあり方について考え、活力と魅力ある街づくりを推進していくことを目的としています。そのためにシンポジウムやイベント等が予定されています。

当センターも、多摩ニュータウン事業に埋蔵文化財の調査・研究の面で係わってきた経緯から、この事業に賛同し、協力することになりました。

地域開発と文化財保護の調和という、街づくりの原点に立って、これからセンターが目指す方向を探るよい機会だと思います。

遺跡だより㊽

島屋敷遺跡は、中央自動車道の三鷹料金所のすぐ北側、三鷹市新川団地内にあります。遺跡の東側を仙川が回り込むように蛇行して、周辺の低湿地の中に遺跡部分が島状に浮かんでいるように見えるために、島屋敷と名付けられたようです。

住宅・都市整備公団新川団地の建て替え工事に伴うⅠ期工事分の調査は、先に三鷹市遺跡調査会によってなされ、現在整理作業が行われています。埋文センターの調査はそのⅡ期工事に伴うもので、平成八年五月半ばに開始し、今年の九月初旬までかかる予定です。

遺跡の総面積は約10ヘクタール弱で、今回の調査対象は2.1ヘクタール強です。遺跡は団地造成時の工事による削平や、団地建物の基礎、配管などでかなり破壊されており、残りが良くありません。これまでの八ケ月にわたる調査で全体の約半分が終了しましたので、古い時代から順に、遺跡の状況を紹介します。

旧石器時代は、立川ロームⅨ層上部（約二万七千年前）及びⅩ層上部（約三万年前）の石器群が検出されています。数は少なく、石核およびその接合資料が大半です。縄文時代は陥穴土坑2基と集石2基の遺構だけで、早期から中期にかけての土器が少量だけ出土しています。

仙川に面した東側の緩斜面からは、古代末（十一世紀）の円形土坑42基と、不規則な配置のピット206基が検出されました。円形土坑はこの時期にかなり一般的ですが、中にはひと回り大きな形態も存在します。土坑もピットも、今はまだ何のためのものかはっきりしません。

大形の掘立柱建物跡

中世以降になると、掘立柱建物跡2棟・井戸2基・地下式坑9基・土坑72基・ピット250基が検出されています。本遺跡の島屋敷の名称もこれら遺構に由来するようです。地下式坑は、墓か室か意見がわかれます。中世には当地近辺に金子氏という豪族が居住した記録もありますので、金子氏に関連する遺構が含まれている可能性があります。

掘立柱建物跡の1棟は、柴田陣屋ではないかと思われます。柴田氏は勝家（かついえ）の時に豊臣秀吉に滅ぼされますが、勝家の孫にあたる勝重（かつしげ）が徳川家康について戦い、軍功をあげて二千五百石を拝領する旗本となっています（当地と入間で五百石）。柴田氏は勝重のあと勝興（かつおき）・勝門（かつかど）と3代にわたって当地を拝領しますが、元禄十一（1698）年、勝門の時に領地替えになります。

柴田氏の以後、当地がどのように利用されたかはわかりませんが、大正時代になり津村順天堂（現ツムラ）が薬草園を開いて、昭和三十年まで存続していました。そして住宅公団（旧）により買収され、新川団地が建設されました。（今井　惠昭）

〔表紙解説〕

この土器はNo.669遺跡から出土した縄文時代前期終末の深鉢形土器で、つい最近、報告書を刊行したところです（「多摩ニュータウン遺跡・先行調査報告4」）。報告では2個体としましたが、その後、1個体に復元されましたので、一部記述の訂正をかねて資料紹介とします。

土器は底部を欠損するものの、ほぼ器形の全体を知ることができます。金雲母を含む特徴的な胎土で、焼きも良く、外面は濃茶褐色です。口径36cm、現高35.5cm、底径は12cm前後になるようです。

胴部が段状に膨らむ特徴的な器形で、上半部では渦巻状とレンズ状の文様を交互に配した文様帯が、二段施文されています。数本単位の沈線と器面を抉り取る陰刻で文様が施されており、胴下半部には矢羽状、底部付近には横位沈線が施されています。レンズ状文は渦巻状文の間に1個ですが、部分的に2個のところがあります。

これらの特徴から、遺跡の発見例が少なく「幻の縄文時代の土器」と称される、十三菩提式に比定されます。多摩ニュータウン地域のみならず、この時期を考える上での貴重な資料と言えます。（宇佐美　義春）

文化財講座 〈29〉

大江戸掘りもの帖 ～其六～

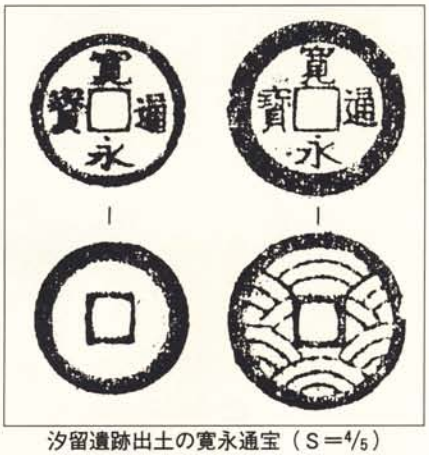
汐留遺跡の銭貨

日本の通貨は、古くは和同開珎などが知られています。この皇朝十二銭以降、江戸時代まで日本で通貨は鋳造されませんでした。江戸幕府が鋳造した最初の銭貨は「寛永通宝」で、中央に四角い孔のある銅製の一文銭です。寛永通宝は公用銭ですから全国各地から出土しますが、大名屋敷ともなれば、さすがに保有量も多く格段に違います。

現在、平成四・五年度に調査した汐留遺跡の報告書を作成していますが、二年間の調査で出土した銭貨は、1800枚を超す勢いです。

出土した銭貨の多くは寛永通宝ですが、全体の約4％は中世期に宋や明から大量に輸入し、使用されてきた渡来銭でした。

江戸時代になっても初期には併用が許されていたので、渡来銭が含まれるのは、決して珍しいことではないのです。ただし、千代田区丸の内三丁目遺跡で出土した銭貨と比較すると、汐留遺跡では渡来銭の占有率が少なく、遺存状態もあまり良くありませんでした。この違いは双方の大名屋敷が形成された年代差による



汐留遺跡出土の寛永通宝（S＝4/5）

と考えられます（丸の内三丁目遺跡の主体は江戸初期）。遺構や他の遺物などからも、両者には年代差が認められます。

十七世紀中頃より、幕府は寛永通宝以外の銭貨を認めないお触れ書きを出していますから、十七世紀中頃以降になると、渡来銭の出土量が減少してきます。

また汐留遺跡の渡来銭は大半が磨耗が著しく、後々まで使用され続けられたのでしょう。

各種の銭貨は最初に鋳造された年代がはっきりしているだけに、遺跡の時期や年代を推測するのに有効であるとともに、時には遺構の性格を知る手掛かりにもなります。

汐留遺跡の遺構の多くは十七世紀中頃から構築されていますが、銭貨も伴出しています。この頃から渡来銭は減少するようになり、寛永通宝以後の銭貨がセットで共伴してきます。最近ではこの銭貨のセット関係により、ある程度年代を推測することが出来るようになりました。

しかし、銭貨は長く使用されるものでもあり、他の遺物と総合して時期の決定をすることが肝要です。

（竹尾　進）

保存科学室こぼれ話 (三)

センター屋上に酸性雨採取器・影響モニターを設置

皆さんは、酸性雨や酸性霧などの環境汚染が文化財に悪影響していることをご存知でしょうか？

自動車の排気ガス、工場や焼却場の煙突から排出された酸性のガス（NOx・SOx）が環境汚染の元凶で、雨に溶けて酸性雨になると言われています。このような影響は、気候や季節などの気象状況、地形が大きく関係します。

昼も夜もいつも同じ所で雨や風にさらされているお寺の屋根や屋外に展示された彫刻などは、材質や形、置かれている環境（場所）が様々で、環境汚染の影響が心配されるのです。

センター屋上には毎月の雨の量、pH、塩酸、硝酸、硫酸の濃度を測定するための酸性雨採取器を設置しています（写真）。これにより多摩地域の汚染の種類、季節による変動（汚染の調査）を知ることができます。

また、環境汚染の影響の状況を知るために、標準大理石の板を影響モニターとして大気中にさらし、酸に冒される変化量を測定しています。

同じ場所に長くさらされた状態にある文化財には、いろいろな環境が関係するため、長期にわたり定点観測することが重要です。その調査がスタートしました。（門倉　武夫）

◎展示ホール休館のお知らせ

現在、展示中の「縄文中期・多摩のむら」は、三月九日に終了し、十日から十五日まで、平成九年度に向けた展示替えのため休館します。

三月十六日（日）からは、企画を新たに、「丘陵における文化の醸成」を展示しますので、ご覧ください。

定例文化財講座の開催

谷口康浩氏の講演風景

本年度の第5回として、十一月九日（土）に、國學院大学の谷口康浩講師による「縄文中期の拠点集落と領域」の講演と映画「ゼンマイ小屋のくらし」を上映しました。

周辺遺跡の資料集成と分析を通して、№72遺跡の拠点集落を中心にする領域は、ニュータウン地域にほぼ相当することが話されました。

当日は、汐留遺跡の現地説明会とも重なりましたが、86名もの参加者がありました。

第6回として、一月二十五日（土）に、当センターの西澤明調査研究員による「縄文時代の墓制」の講演と、映画「多摩の大昔」を上映しました。参加者は148名と大盛況でした。

外国人研究者の来訪

左記の研究者が当センターを来訪して展示施設や保存科学室、遺物整理室などを視察し、職員と親しく意見を交換しました。

十月十七日（木）祁　慶國　北京市文物研究所研究室長

十一月五日（火）マリー＝ル・ミエール　フランスCNRS研究員

十一月二十一日（木）韓国文化院の研修団一行43名

一月十六日（木）ヘレン・ガニアリス　ロンドン博物館主任研究員

マリー・ル・ミエール博士の講演

汐留遺跡の現地説明会

恒例となりました汐留遺跡の現地説明会が、十一月九日（土）に開催されました。このところ新聞報道等が相次いだこともあり、これまでで最高の、1350名もの参加者がありました。

「掘り出された都市」展終わる

江戸東京博物館で開催されていた「掘り出された都市」展が、好評のうちに、一月十二日（日）に終了しました。今回の展示は、丸の内三丁目遺跡や汐留遺跡の資料を中心に構成されたもので、東京都教育文化財団も共催事業として参画しました。

分室だより

市ヶ谷分室　29地点で東御殿の厨房施設、35地点では表玄関付近の礎石跡・便所跡が、江戸時代の絵図面どおりに検出はじめたところです。

汐留分室　仙台藩御殿跡では埋め立て施設の、竹のしがらみが見つかりました。また、アップルサイダーを入れたガラス瓶・クレイパイプ・西洋陶器・骨髄を抜き取った跡がある獣骨・貝殻などの遺物が、明治時代のゴミ穴から見つかっています。お雇い外国人が飲食し、捨てたものかもしれません。

汐留遺跡の現地説明会

板橋分室　整理期間も二カ月を切り追い込み段階です。弥生時代の住居跡220軒、古墳、方形周溝墓、旧石器と、内容盛り沢山の報告書を今秋には刊行します。乞うご期待。

新川分室　1924年から1955年にかけて、遺跡内に津村薬用植物園があったとされています。ただし、現在までのところ津村順天堂の社史以外に確認できる資料がなく、各方面に探索の網を張りめぐらしています。

日の出分室　土器の分類と接合がほぼ終了。実測個体も400を数え、細かく分析できるようになりました。その結果、古墳時代後期の集落が四期にわたり変遷していることが判明しました。

南大沢整理所分室　年度末の報告書刊行に向けて、調査研究員一同、血走った眼で頑張っています。

西国分寺分室　縄文時代の文化層の調査は2月の上旬で終了。現在は旧石器時代の調査に集中。大きく三つの文化層からなります。